

「僕の弟」

塩谷町立塩谷中学校

1年 福田 能基

僕には二歳違いの弟がいます。弟は小さい頃から、僕のことを名前で呼ぶので、一度も「お兄ちゃん」と言われたことがありません。そして、どこへ行くにも「よしき、よしき。」と言いながら、僕のあとをついて来ました。だから、僕の友達とも、鬼ごっこや雪合戦などをして、よく遊びました。僕が野球チームに入ると、弟も野球に興味を持つようになりチームに入れる学年になるとすぐに、野球を始めるようになりました。

僕がすることは、自分も挑戦してみよう、できるようにになりたいという思いが弟には強くあったのかもしれない。

弟は生まれつき足の筋力が弱かったため、小さい頃は専用の装具を着けていました。それがないと、立つことすらできなかったそうです。白、オレンジ、黄色、赤、青と大ききの違う装具が、今でも大切に保管されています。弟が成長するたびに、装具の色もサイズも変わりました。いわば、そのカラフルな装具は弟の努力の結晶と言えるでしょう。幼稚園に入る頃から、一時間ほどかけて宇都宮市内の病院に定期的に通い、数年間リハビリを続けてきました。僕も付き添いで行ったことがありましたが、実際にリハビリの場面を見たことはありませんでした。でも、そのリハビリは、小さな弟にとって、かなりつらいものだったようです。だから、担当の先生から、「今日で終わりです。」と言われたときは、とてもうれしかったのではないかと思います。病院の帰り、近くのデパートで遊ぶことが楽しみだった弟は、少しがっかりしたと言っていました。つらいリハビリから解放された喜びの方が、はるかに大きかったことでしょう。他人にはわからない痛みを耐えて、弟は本当によく頑張ったなあと思いました。

弟は今でも運動は苦手なようですが、みんなと一緒に体育の授業を受けたり、学校行事にも積極的に参加したりしています。年末には、塩谷町で行われる「しおや湧水の里マラソン大会」にも出場しました。父と一緒に走った二年前は、弟にとって納得のいかない結果だったそうで、その悔しさを払いのけるかのように、一年間、ひたすら、家の周りを走り続けました。その努力のかいあって、去年は大きく記録を更新することができ、とても満足したようです。弟の喜ぶ様子を見て、僕も何だか誇らしい気持ちになりました。

そんなある日のことです。弟が学校から帰ってくるなり、「お前の走り方、おかしい。」と友達から言われたと、泣きながら母に訴

えてきました。母は、「悔しかったら、一生懸命頑張りなさい。自分のために自分で努力しなさい。」と弟を励ましました。それからというもの、頑張り屋の弟は、走り方の練習を一生懸命にするようになりました。

しかし、しばらくすると、今度はお腹が痛いと言って、学校を休むようになったのです。そんな弟に対して、家族全員で、「そんなことで負けるな。頑張れ！」と励まし続けました。ところが、ついに、「僕だって頑張っているんだよ！」と、今までの自分の思いを吐き出すかのように、弟が叫んだのです。そして、それまで見たことがないくらいに激しく泣き出しました。あれから何度も同じことを友達から言われた弟は、予想以上に深く傷ついていたのでした。

やがて、ぽつりと、「どうして僕は、能基みたいに足が丈夫に生まれなかったの。」と弟が言いました。それを聞いた母は、少し涙ぐんでいるように見えました。母もつらかったと思います。僕も何と言葉をかけたらよいのか、わかりませんでした。

弟は人一倍頑張ってきたのです。つらいリハビリも乗り越え、苦手な運動からも逃げずに、精一杯努力してきたのです。それを周りで「頑張れ。」と言うことは、弟を追い詰め、不安にさせてしまったのかもしれないと思いました。

人は皆、それぞれの立場で、苦しさやつらさに耐えながら生きています。時には偏見や誤解から、心ない一言を浴びせられ傷つくこともあるでしょう。精一杯頑張っているのに、これ以上、何を頑張ったらいいんだと憤ることもあるかもしれません。そのとき、「頑張れ。」ではなく「頑張っているね。」と、いつでも優しく寄り添ってくれる人がいれば、その安心感を持って、人は強く生きていけるのではないのでしょうか。

今、弟は毎日元気に登校しています。時々嫌な思いをすることもありますが、気にしないことにしたのだそうです。僕は頑張っている弟の気持ちを理解し、見守りながら、共に強く成長していきたいと思っています。